

8. 慎重さが求められる洪水対策

先の2022年7月の宮城県北部豪雨災害では、この7年間に3度も被害にあった地域に対して、災害復旧対策をするということになりました。国をはじめ多くの関係者が視察に訪れて、被害を受けた集落に輪中堤を作ることを勧められたそうで、知事は諸手をあげて賛同しているというニュースがあり、得意げにTVで発表していました。輪中堤というのは、被害が想定されているところを堤防でぐるりと囲み、河川水が入り込まないためのもので、特に珍しいものではなく古くからの方法です。一見すると、集落の周りに堤防があって、河川水があっても確実に浸水から守れるような城内のように思われると思います。いわば、家の周りを土嚢で囲むようなものと景観的には見えると思います。会見では、河川掘削の土砂を使用することでコストも期間も短縮できるということでした。ここまでは、優れたアイデアということになりますが、仮に用地の問題がないとしても、堤防のような抑止型の構造物は実はそんなに容易な施工ではありません。まずは、堤防を構築するには基礎地盤がしっかりしていることが重要で、洪水の常襲地帯ということは軟弱地盤の可能性が高いということになります。二つ目は、河川掘削による土質が液状化を含めて堤防の材料として問題がないかどうか、締固め効果が期待できるかどうかという工学的な課題もあります。三つ目は囲まれた地域の排水の問題があります。いずれも、改善や改良は不可能ではありませんが機能とコストの関係があります。今回の輪中堤の採用に当たっては、維持管理を含めた他の工法との組み合わせや比較検討を行った全体的な視点での設計が必要です。そして、河川の特長や流域治水、文化というものをベースにして地域社会とともに十分に検討する必要があります。単なる復旧事業であるという目の前のことだけに注目して、当座の民生安定を主題にすると、将来禍根を残すことにもなりかねません。

そこで、まずは被害を受けた家屋や宅地に対しては、大型土嚢などによる仮設的な対応をしたうえで、もう少し広い視野から専門家、行政、地域が一体となって時間をかけて知見を求めるべきだと思います。生活環境の保全是コストが安いだけが最重要なのではありません。たとえば、地域のゾーニングをしてリスクのあるところは居住域から離すというような考え方もあると思います。あるいは遊水池という高度なコミュニティの醸成に挑戦することも、次世代を見据えた時には、河川遺産として意味のあるものになるのかもしれませんが。いずれにして、今回の水害対応は技術的、社会的および文化的な面からも、今後の河川管理をしていく上での地域づくりや土地利用とも連関する課題を投げかけているものと考えられます。